副査の先生のコメント

井上菜摘論文

市街地の緑化の衰退と発展

―宇都宮市と世田谷区の言説分析を事例として－

副査：石井大一朗先生

卒業論文を拝読いたしました。全体としてとてもわかりやすく研究者の立ち位置も明確であり、研究目的に合わせて理論的に展開できていました。LRT という大きな政策展開における評価を緑化という観点から捉える観点も新鮮でした。私も勉強になりました。卒業論文として極めて優秀な内容になっていました。下記に感想も含めていくつかコメントいたします。井上菜摘さんの今後の研究や実践の展開に期待して列挙します。

1.歴史的経緯を紹介することで分析結果との関連性がとても理解しやすくなっていました。政策分析において時間的経過を捉えることの重要性が１章、２章を通してよく伝わってきました。

2.対象とする都市を象徴する大きな事業（今回は LRT）を軸に分析・評価することで分析結果が具体的となり本研究テーマを自分ごととして理解しやすくしていると思いました。

3.議会の議事録を対象とした言説分析とすることで分析の枠組みを明確に捉えることができました。気候変動対策と言いますと、行政の施策、市民活動など議論が多方面に及び捉え所のない調査分析となってしまうことが少なくないと思いますが、調査対象が焦点化されており、分析結果が理解しやすくなっていました。

4.世田谷区と宇都宮市を比較するような展開になっていますが、世田谷区と宇都宮市は都市開発の歴史や市民社会形成の歴史も異なることから、調査対象の中心が宇都宮であり、先行事例として世田谷区を扱っているという位置付けの方がスマートになると思いました。あるいは両者を並べて比較する有効性をもう少し説明できると良いかと思いました。

5.上記4.と比較して、欲張りではありますが、宇都宮市を主な調査対象とした場合、類似の地方都市との比較という観点から宇都宮市の置かれている状況を把握してみたいと思いました。

6.上記3.とも関連しますが、例えば p22 表６に整理されたような８つの言説、他の緑化事例の論点との相違について特徴的はあるのでしょうか。今回の議事録からのみ得られた言説なのか。ここでの新規性が何かを知りたいと思いました。

7.気候変動対策として本研究が重視している、Nature-based Solutions(NbS)について、説明がありますが、本研究の重要なキーワードでもありますので、NbS とはどのような条件を満たすと NbS となるのか１章の最初で説明があると良いのではないでしょうか。これにより分析内容をより理解しやすくなります。

杉浦理子論文

日本のオーガニックコスメは信頼に足りうるのか
—認証団体と製造メーカーへのインタビュー調査をもとに—
副査：磯谷玲先生

多くの資料・文献にあたり、またインタビューを実施するなどある意味では卒論以上の取り組みも見られ、卒業論文に求められる水準に達しているものと評価できる。以下この点を前提として幾つかコメントしたい。

・課題設定が「信頼に足りうるのか」というもので、これはこれで一つの課題として成立するものと思うが、欲をいえば、なぜ「信頼に足りうるもの」が出てこないのか、その要因や背景についてより深く検討して欲しかった。社会的な事象に関わる評価は、自然現象を対象にしたもののように明確な答えが出にくく、人や立場によって変わってくる場合がある。よく使われる例だと水が半分入ったコップをみて「半分も入っている」と考えるのか「半分しか入っていない」と考えるのか、ということである。したがって当該事象の背景や、利害など客観的な状況や主体の評価・考え方などを複合的に描くことでより課題に接近できるのでは、と考えるからである。

・評者がきちんと理解できていない可能性もあるが、オーガニックコスメの品質向上を客観的に論証（確認）する方法はあるのか（それがない故に他者の評価＝認証が大事、ということなのかもしれないが）？医薬品であれば、その効能・効果について確認する標準的なプロセスは確立しているように思われる。それと対比する（できる）ものがないのだとすると「品質向上」をどのように、客観的に示すことが可能なのか、という点がわからなかった。

・卒業研究に相応しい、意欲的な取り組みと評価できる点も多々あるが、日本語表記・表現という面ではかなり課題が残るものとなっている。何点か具体的に示しておきたい。

- 13 ページに「従来の化粧品は石鹸に代わる洗浄主成分として登場した合成界面活性剤を多く使用されている」とあるが、これは「活性剤を多く使用している」か「活性剤が多く使用されている」のどちらかではないか（ちなみに、能動態と受動態が混在しているケースは他にもある）。
- 23 ページでは「信頼性が高いものとして止められていないのが現状」とあるが、これは「受け止められていない」の間違いではないか。
- 26 ページでは「認証団体及びメーカーを整理したものだ。また、図〇では、認証団体と…」とあるが、これは次のページにある表 5、あるいは図 6 のことではないのか。

一つ一つの間違いは大したことではないかもしれないし、提出期限が決まっている中で「日に夜を継いで」作業をした結果なのかもしれないが、これらの「間違い」や不適切な表現があまりに多い。

仕事（この場合は卒論）は形式面においても評価されるものだから、社会に出た後は十分留意してもらいたい。

髙橋この葉論文

自治体新電力の発展拡大における障壁と課題
—宇都宮市と先行二事例の比較分析を通して—
副査：清水奈名子先生

国際学部のディプロマ・ポリシーに示されている到達目標、並びに卒業論文に要求される水準を、十分に満たした論文として評価できます。以下、特に評価できる点と、さらなる考察が求められる点に分けて、コメントを記しました。

＜特に評価できる点＞

1. 自治体新電力の発展と拡大における障壁や課題を明らかにするために、関連する先行研究や一次資料、データを丁寧に分析しながら 2 つの仮説を設定し、3 つの事例に関わっているキーパーソンへのインタビュー調査によって集めた情報を分析しながら仮説を検証することで、学術的、実証的かつ独自性の高い考察を行うことができている。特に興味深かったのは、先行研究では可視化されていなかった外在的な要因として「大手電力による支配構造が強いことが認識されていないから」（22 頁）という、新しい仮説を検証したところ、米子市と宇都宮市で仮説に親和性の高い現状が確認された点である。
2. 3 つの事例を丁寧に検証することで、自治体新電力のなかにも多様な設立の経緯、事業の目的、経営方法があり、また宇都宮市の例のように設立当時から事業目的が多様化している事例もあるなど、自治体新電力事業の多様性を動態的に捉えることができている点も、非常に興味深かった。特に設立の経緯と、事業参加主体や事業目的の間に強い関連性があることを明らかにしている点も、本論文による重要な貢献だと言える。
3. 論文の主題、議論の構造、分析枠組みと分析方法、論理の流れがいずれも明確であり、先行研究や資料を適切に参照、引用しつつ、学術的な形式で議論を構成することができている。日本語表現も非常に正確であり、図表を使って読み手にわかりやすく情報をまとめており、完成度の高い論文に仕上げることができている点も、高く評価できる。また、巻末にはインタビュー調査結果の詳細も掲載しており、記録としての価値も高い。

＜さらなる考察が必要な点＞

4. 第 3 章第 2 節で述べられているように、今回取り上げている 3 つの事例のうち、中之条パワーは人口規模や電力供給量が小さいこと（27 頁）を考えると、第 1 の仮説である「地域企業の主体的参画がないから」という課題について、米子市や宇都宮市と同様に検証することが妥当なのか疑問に感じた。町の人口が 1 万 5 千人規模であれば、出資可能な「地域企業」が存在しないことも十分想定されるだろう。また「地域企業」をどう定義するかに関わるが、中之条パワーにとって地域企業とは、町内に事業所を置く企業のみを指すのか、町民が働いている周辺基礎自治体に所在する企業も含めてよいのかなどについても、検討する必要はないだろうか。
5. 宇都宮市の事例に関するインタビュー調査で明らかになった課題として、「民間と行政の事業における目的の差異」（38 頁）が指摘されていたが、これは自治体と民間事業者が協働で電力事業を行う際の課題として、さらに検討する必要があると思われる。電力の供給事業は、市民の生存に不可欠なインフラ事業であり、利益最大化や経済合理性を優先的に追及する市場経済型ビジネスとは異なる性質をもつ。さらに「脱炭素社会への貢献」「地域経済活性化」や「地域レジリエンスの強化」（17 頁）なども、市場競争のなかでコストを最小にしようとするビジネスモデルでは追求が困難な課題である。その意味では、自治体新電力に関して自治体が協働すべき民間事業者とは、社会への利益の還元を目的とするソーシャルビジネスを追求する企業や NPO などの主体になるのではないだろうか。こうしたソーシャルビジネス系の企業や NPO と自治体が連携している自治体新電力の事例はないのだろうか。

コメントは以上です。今後検討が必要な課題についても指摘しましたが、重要なテーマを取り上げた、大変意欲的な論文だと思いました。ご卒業後のご活躍をお祈りしています。

田所莉沙論文

なぜ日本では地中熱利用が広がらないのか
—国際比較、国会会議録言説分析、インタビュー分析をもとに—
副査：古村学先生

本稿は、地中熱利用が日本において広がらない要因にかんして、政府の政策に焦点を当て分析したものである。副査読者自体は、エネルギー政策にかんして素人であり、また本稿における分析手法にかんしても明るくないため、適切な査読ができているか不安であるが、以下、評価点二点、改善点三点から見ていきたいと思う。なお、この査読でのページ番号は、田所さんから受け取った二段組のバージョン（ファイル名「卒業論文提出用_+田所莉沙」）をもとにしている。

評価点の一点目は、地熱利用が広がらない要因として、知られていないことがあるが、それを知らしめるもののひとつとして、本稿自体に意味がある。１章から３章にかけての丁寧な記述は、たいへん読みやすく、その役割を果たしている。とくに、アメリカ、スウェーデンでの拡大していく成功事例は、４章につながるものとしてあるが、たいへん興味深いものであった。

第二点目として、本稿の構成の適切さがある。１章で地中熱の概要を示し、２章で日本、３章でアメリカとスウェーデンの概要をしめし、本稿の仮説を示す。４章では、国会議論の言語分析から仮説を検証し、５章において、専門家への聞き取り調査から、仮説検証の補強をする。欲を言えば、６章もしくは終章に、4 章と 5 章を踏まえた考察が欲しいところであるが、それまでの考察でも許容範囲であろう。

改善点の一点目であるが、p.21 に仮説が 4 つ挙げてあるが、実際には二つに集約される点があいまいであるので、明示すべきと思われる。アメリカなどでは、仮説 2 があったからこそ、仮説 3、4 へと進んでいる。課題であると認識されたからこそ、政治的なリーダーシップが発揮され、政策パッケージが作られたという流れである。仮説 2 が棄却されれば、必然的に 3 と 4 も棄却されることから、これらは仮説 2 の下位仮説にすぎない。仮説 2 が棄却されているのに、なぜか 3 もしくは 4 が棄却されないのであれば面白いが、そうでなければ、当たり前すぎるので、1 と 2 を中心にして、なぜ 2 が生じるのかを論じたほうが、効果的であろう。

二点目であるが、第 4 章の言説分析の結果（p.28）、とくに第二と第三の要因が、あまりにも当たり前のステレオタイプとしての政府・行政批判を繰り返しているだけに思えることである。第二の要因として、「与党の官僚レベルの議員の中には発言力の強い人が多く、問題や課題を強調している」（ｐ.28）とあるが、自民党一強体制からくる必然性を言っているに過ぎない。委員会での審議などは名ばかりで、与党が決めたこと、もしくは官僚が決めたことを与党が発言し、野党の発言など無意味であるという、あらゆる政策議論にあてはまる政府批判である。紙面の都合上、詳細は避けるが、これは縦割り行政にも当てはまる。

日本の政治の貧困、縦割り行政、官僚の保守主義などを批判し、改善を促す、よくある野党や活動家による政治主張である。論争のあるところであれば、どのようなテーマでも当てはまる。ここでは、地中熱を扱ったからこそ見えてきたもの、既存の主張を超え出るような視点、小さなものでもよいので、これが示せればよりよいのだが、これは難しいだろう。それならば、結局は同じ要因に落ち着くとしても、ただ単に主張するだけでなく、丁寧な検証と考察をすれば、たんなる政治主張をこえた、実証的な既存の言説にたいする証明となったのではないだろうか。

三点目として、インタビューによる検証であるが、推進派の擁護のように見えてしまい、妥当性に欠けるように感じられる。p.38 の表では、×にかんしては、「機器の性能低下……」にかんしては妥当であるものの、もっとも重要な「利益の少なさ」は議論のあるところである。金銭というよりも、環境コストとして利益があるというのは、議論のすり替えとみられるであろう。これにかんしては、別項目としてたて、環境コストに関する議論を丁寧に分析する必要がある。そのことにより、べつの知見が得られたかもしれない。

また、△が多くあるが、これは、どちらともとれるものであり、認識不足というより、現段階では不明なものととらえてもよいのではないだろうか。現実問題としては、広がっていないゆえに、不明なことが多いというのが現状であるかと思われる。国のサイズなど、小さな誤謬を指摘するのではなく、不確かなものは、不確かとしてとらえ、主張ではなく、事実を描いたほうが学問的である。

なお、ついでとなるが、このコストの面は、本稿では触れられていないが気になる。地熱装置を設置するのに、具体的にいくらかかるのか、どの程度の冷暖房費の削減になったのか、スケールメリットの具体的金額は。アメリカなど諸外国ではどうなのか、補助金はどの程度あるのか、それがなくても採算は合うのか。これらの数値が手に入らないのであれば、それはなぜなのか。これからわかることもあろう。

上記に指摘してきたように、不足している面はあるものの、国際学部のディプロマ・ポリシー的には十分な成果をあげていると判断することはできるであろう。また、地熱利用にかんしては、今後の CO2 問題のゆくえにより、政府・行政の政策に取り込まれる高い可能性を持っている。第一の評価点とかかわるものであるが、そのことをいち早く研究対象として挙げたものとして、評価に値する。

最後に、テーマにかんするものに限らず、本稿を書く中で学んできたものも多くあるだろう。書き上げてはじめて気づくことも、書き上げたのち、社会に出てしばらくたってから気づくこともある。この気づきのためにも、卒業したのちにも、勉強を続けていくことを期待する。

藤田晋之佑論文

なぜ日本の使い捨てプラスチック政策は遅れているのか
—レジ袋有料化政策の言説分析を通じて—
副査：栗原俊輔先生

本論文は、日本におけるレジ袋有料化政策の抱える問題点を、その政策決定と値段設定に焦点を置き、言説分析を用いて、その要因を明らかにすることを試みた、意欲的な研究である。分析において、中央環境審議会循環型社会部会レジ袋有料化検討小委員会をはじめ、政策決定にかかわる委員会等の言説分析を行い、そのプロセスを明らかにしたうえで、学生へのアンケートを実施したことは、政策決定レベルとコミュニティレベルにおける様々な認識のギャップを明らかにしている点は評価できる。現代社会において地球レベルで解決すべき問題であり、その中で日本の進度・深度、課題が分かりやすくまとめられ、非常に意義のある研究となっている。

言説分析は、「レジ袋有料化検討小委員会」など、ある意味緊張感のある会議の議事録を取り上げ、その言説を丁寧に拾い出している点は非常に評価できる。この分析には議事録の読み込みや分析作業等、多くの時間をかけたと思われる。

この言説分析に加えて学生アンケートとその分析を行うことにより、レジ袋とプラスチック政策についての社会での認識が対照的に描き出されていることが研究結果を複層的に提示している。

以上のことから、本論文は卒業論文として、学部が定めた基準を満たすものと評価できる。

以下、詳細等：

- 構成

基本的に非常に簡潔に論理的にまとめられた構成であり、読みやすい。ただ、1 章でのプラスチックの起源を丁寧すぎるくらいに説明をしているのは、その後の章、特に結論等後半の文章量と比較するとバランスが悪いうえ、リサーチクエスチョンである「日本でのプラスチック政策の遅れ」の原因を探るための論拠としても不要であり、もう少し簡潔に背景としてまとめてもよかったかもしれない。

- 結論

論文構成は論理的で結論までの導きが分かりやすい一方で、言説分析のあとに学生アンケートとその分析が入っている。アンケートの実施自体は前述のように評価できるが、言説分析での政策レベルの視点とその分析を、学生の認識がどのように対応しているのか、若干分かりにくかった。あくまでも宇都宮大学の学生の認識であり、言説分析で扱った政策決定レベルの分析との比較には、弱い。一般化はできないのではないか。

- 今後の課題

前述に関連し、せっかく学生アンケートまで実施したので、もう少しアンケート結果を結論や今後の課題に入れてもよかったのではないだろうか。政策決定レベルでの分析を起点に、アンケートから見えてきた結果から、どのような領域をさらに追究することにより、日本のプラスチック政策の遅れを解決する方向性を示すことなどもできたのではないか。

- 形式等 i

非常に丁寧に体裁を整えてあり、誤字脱字や引用・脚注等の方法も正しくそろえられている。

学生アンケートの使い方には改善の余地があったが、政策レベルでの分析と学生の意識を比較することにより、政策決定のプロセスに市民の声が反映されていない、またはあまり反映されていない可能性が分かりやすく明示されているのは、非常に興味深い。欧米等プラスチック政策先進国と日本の産業界の意識の違いと、学生の認識を比較してみてもさらに面白い結果がでたかもしれない。

卒論執筆お疲れ様でした。社会に出たら、まさに審議会や委員会などを身近に感じながら、お忙しく過ごされることでしょう。そんな時は、栗原資料室で同級生と卒論を執筆していたことを思い出しながら頑張ってください。

藤田雅論文

欧州・日本・鳥取県の断熱基準の差異をめぐる認識論的考察

副査：横尾昇剛先生

欧州、日本、鳥取県における断熱基準に差異が生じたのはなぜかという、社会的かつ技術的な問題に関して、「エネルギー貧困」、「健康」、「気候変動対策」、「費用対効果」という複合的な観点から分析を展開することにより、本問題の複合的な要因を明らかにしているという点において、非常にオリジナル性が高く、優れた内容の論文となっている。

先行研究をもとに、断熱基準の国際比較においては欧州と日本の現状について比較を行うとともに「エネルギー貧困」、「健康」、「気候変動対策」、「費用対効果」の観点が欧州における断熱基準の強化や義務化を働きかける重要な要因となっていることを導き出しており、調査、分析力として高く評価できる。

日本における断熱基準が遅れていることの要因については、その歴史的推移について分析し、諸外国と比べて断熱基準が格段に緩いことや「エネルギー貧困」や「健康」、「気候変動対策」という論点が欠如することで、日本における基準強化や義務化が遅れる要因となっていることを示した。また、鳥取県における断熱基準の推移に着目し、鳥取県では、民間、専門家、行政間でパートナーシップが構築され、独自断熱基準の制定に至っており、特に「健康」と「費用対効果」という観点が、鳥取県での厳しい独自基準制定の要因となっていることを明らかにしている。

断熱基準の強化、普及の要因について欧州、日本、鳥取県を対象とした調査および比較分析により、その構造要素を明らかにしたことは、非常にオリジナル性が高く、また「エネルギー貧困」、「健康」、「気候変動対策」、「費用対効果」といった複合的な要因の影響を明らかにしたことは、今後の国内における断熱基準の強化，良質な住宅建築を普及させていく上で社会的意義も高いと評価できる。

以上、宇都宮大学国際学部ディプロマ・ポリシーに照らし合わせても、本卒業論文にて、自ら設定した課題に対して、資料・文献を収集し、問題構造を理解し、21 世紀型グローバル人材（グローカル人材）としての主体性と実践的な行動力を備えことができていることを示しており、合格水準に達していると評価します。

山﨑彩貴論文

日本のプラスチック発生抑制への取組みの課題と可能性
リフィルうつのみやの参与型観察と学生アンケートを通して
副査：松村史紀

プラスチック問題を解決したいという強い問題意識とそのための地道な活動によって支えられた意欲的な卒業研究である。とくにリフィルうつのみやの精力的な活動については、その成果はもとより、それをできるだけ学術研究のなかで詳細に紹介し、検討したことの意義は大きい。活動を「準備期」「萌芽期」「展開期」として整理したことで、各段階の進展が理解しやすくなったと思う。今後、この分野で研究や実践を志す者にとって、本研究で紹介された一連の情報はとても貴重な資料的価値を持っていると考える。

2. 個別のコメント：

1) 使い捨てプラスチックの規制について国際社会の取組、アジア、日本の現状をきちんと踏まえている点は個別事例の研究にとってとても重要な前提になっており、評価できる。

2) 第 3 章はおそらく本研究のなかで最重要な箇所であり、活動の実態（とくに行政側との折衝に苦労した点）が克明に記録されている点はとても興味深かった。政策決定・実行までにどのような障壁があるのか、とても勉強になった。

3) 第 3 章の内容を「認識変化」から捉えなおすために第 4 章を設けたのだと思う。部分的にはそれが成功している点もあると思うが、やはり映画上映や授業でのアンケートによって見えるものが部分的であることは否定できないと思われる。第 4 章の論証を補充するために別の先行研究で実施された「認識変化」の効果などを利用すれば、今回のアンケート結果がより意義深く議論できたように思う。

4) 活動の当事者がそれを客観的に分析者することはそれ特有の難しさを伴う。「準備」「萌芽」「展開」という各段階は説得的な整理であるとも思うが、やはりとても短期的な時間軸のなかで整理せざるを得ないものだと思う。今後、長期にわたり活動を続ける場合、この時期区分は見直しを迫れることもあるのではないかと思った（もしかすると現段階はとても重要な事業の前の「準備」段階にあるかもしれない）。

いずれにしても、情報の豊富な意欲的な卒業研究として高く評価したい。

最後に大学に給水スポットを設けて下さったことに心より感謝いたします。とてもよい試みだと思います。ぜひゼミで継承していってください。